

9月27日（日）主日礼拝レジュメ

「神を信じて生きるとは」 伝道者の書2章25、26節

天地万物の造り主にして唯一まことの神ということは、一神教と多神教というくくりではない。天地万物の造り主であるお方以外のものを神とは認めない。

25節「実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができるだろうか」とあるが、これは、24節の神の支配の中で、神の許しの中で、人は食べたり飲んだり、自分の労苦に満足を見出すことができるということを受けて、なおもそのことを強調するかのよう、「実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができるだろうか。」と言っている。これは、神を離れて、ただ食べているだけ、時には食べるために働くという感じになってしまっていないだろうかということを意味している。クリスチャンは食事が与えられていることを神に感謝し、食べるために働くということではなく、食事は神が与えてくださると信じて、ただ目の前にある勤めを忠実に果たす人生観をもって歩んでいる。そして、なすべき仕事を与えられ、日々の食事が与えられていることに感謝をしながら生きている。これが、神を信じる者の生き方。

また、神を離れた人は、自分で何とかして楽しみを見出そうとする。それは、しばしば一時的で、すぐに失せてしまう楽しみではないか。しかし神が与える楽しみはいつまでも続く楽しみであり、置かれている環境に左右されない楽しみ。それは決して変わることのない、神を喜びとし、楽しみとするからだ。神を信じることで、人生観が180度変えられたからそう言える。

26節「ご自分が良しとする人には知恵と知識と喜びを与え」とあるように、神はその人を大いに祝福してくださる。次に罪人にはとあるが、これは

25節にあるように、神から遠く離れている人たち、神を信じていない人たちのこと。「神が良しとする人に渡すために、集めて蓄える仕事を与えられるからだ」とあるが、神を信じなければ、多くのものを人生で集めても何になるのか。死後、自分が、蓄えて集めたものを自分のものとして持つて行くことはできない。だから「これもまた空しく、風を追うようなものだ」と言われている。

「神が良しとする人に渡す」ということについては、解釈が難しく議論の分かれるところで、具体的な説明もないので、よく分からない。例えば箴言13章22節「善良な人は子孫に遺産を残す。罪人の財産は正しい人のために蓄えられている」や、ペルシャのクセルクセス王は、ハマンから取り返した自分の指輪をモルデカイに与えたこと（エステル記8章2節）、カナンがイスラエルに対する約束の地として与えられたことを挙げる人もある。

すべての人が罪人だった。神から離れ、生きる意味も、目的も、人生の方向性も分からず、迷い、ただ蓄えて集めることだけが自分の人生と思っていた。まさに、それは「これもまた空しく、風を追うようなものだ」というような生き方だった。しかし神を離れて生きていた者が、神にあって生きるようになり、食べるのも飲むのも、自分の労苦に満足を見出すのも神の御手による、すなわち神の支配の中ですべてがなされることを信じて、すべてを神にゆだねて歩み始めた時に、神は人生に知恵と知識と喜びを与えて導かれる。この天地万物の創造主であり、私たちも造られた唯一、まことの神を信じて歩ませていただきたい。